

皆様は自分好きな聖句を持っておられるでしょうか。有名な神学者や牧師たちは、皆自分の好きな聖句、または自分の一生の課題というような聖句を決めていたようです。本日の福音書に選ばれておりました中の、ヨハネによる福音書第3章16節は、昔から多くの人に愛され、親しまれてきた聖句です。ある方は、この聖句は新約聖書全体を一言にまとめたものであると言っておられました。もう一度見てみましょう。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

本日は主に3つのことを共に学んでまいりましょう。

最初に世界のすべて、世界の救いが主なる神のもとにあることを言っています。旧約聖書を読みますと、主なる神は罪や悪を決して赦さず、厳しく罰する印象を受けます。また新約聖書では主イエスの登場により、旧約時代には赦すことをしなかった主なる神に対して、主イエスが愛に富み主なる神の態度を怒りから赦しに変えさせたかのような印象がありますがそうではなく、この聖句は、すべてを始められたのが主なる神であったと言っています。主イエスをこのように送られたのも主なる神ご自身でした。そしてそれは主なる神が人間を愛されたからだったというのです。神がこの世で救いの業を始められ、人間を愛するがゆえに主イエスを遣わされたのだと語っているのです。

次に、この救いの業が主なる神ご自身のためではなく、私たちのためであることを示しています。神がこの世で働かれたのは権力に対するご自分の欲求を満足させるためではありませんでした。そして宇宙全体を服従させるためでもありませんでした。主なる神はご自分の愛を人々に満たすため、さまよう子どもが家に戻って来るまで愛と忍耐をもって待っておられる方であると言っているのです。そこには一人の滅びがあってもならないのです。信じるものがことごとく永遠の命を得ることが主なる神の望んでおられることなのです。

私たちはこの世の生涯を終えますと、天国に迎え入れられる時、この世での業にしたがって審かれ、み心にかなう者に永遠の命を与えてくださいますが、主なる神は信じるすべての人にそれを与えることを望んでおられるのです。こ

れもまた私たち人間を愛してくださったからでありました。

さらにこの聖句は主なる神の愛の広さを語っております。主なる神がそれほどまでに愛されたのは世界でありました。それは一人でもなく、一民族でもなく、一国民でもありませんでした。よい人だけではなく、神を愛する人だけでもありませんでした。すべての世界、誰も愛してくれる者のない孤独な人、神を愛する人と、神のこゝを受け入れようとしない人、神の愛の中にやすらう人と神の愛を認めようとしない人、これらすべての者が主なる神の愛に包まれるということなのです。しかもなお主なる神の愛は自分ただ一人を愛されるようであって、多くの人を愛するがゆえに一人に対する愛が少なくなってしまうようなことはないということです。

このようにまず主なる神があって、主なる神が救いの業を始められた。そして私たちが主なる神を先ず愛するのではなくて、主なる神がまず私たちを愛してくださるのである。そして主なる神はキリストを信じる者だけでなくすべての人を愛されるのである。私たちの心にある主なる神の姿はそういう姿であったのです。私たちはその姿をどう受け止めているのでしょうか。主なる神の大きさを私たちが実感するのが、大齋節にふさわしい私たちの大切な日々でありましょう。